

分科会 I 第 1 分科会

テーマ：「主体的に考え学び合う道徳教育の指導方法の工夫」

提 案 者 福山市立松永中学校
司 会 者 福山市立誠之中学校
記 録 者 福山市立精華中学校
指導助言者 福山市教育委員会

1 はじめに

福山市立松永中学校は、福山市西部に位置する全校生徒 320 名の学校である。本校は 2013 年（平成 25 年）度から 2 年間、「中学校生徒指導集中対策指定校」として、主に生徒指導・教育相談体制の充実、小学校や関係諸機関との積極的な連携を行い、暴力行為の発生数の減少を目指してきた。その素地の下、2015 年（平成 27 年）度からの 2 年間は「学力向上チャレンジ校事業」の指定を、2017 年（平成 28 年）度の 1 年間は「学力向上推進地域」の指定を受け、主に「分かった」「できた」を実感できる授業づくりの取組を行ってきた。昨年度は、「市町の挑戦支援加配」を受け、主に道徳を中心に研究を進めてきた。道徳教育推進教員の加配を受けたことから、これまで実現できていなかった取組を行うだけでなく、2019 年から中学校で全面実施となった「特別の教科 道徳」への接続がスムーズにいくよう、研修を進めてきた。

また、学校の教育活動全体を通じて行っている道徳教育の一端として、ESD の観点から人格の発達や人間性を育み、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育てるために、地域の特色を生かし、地域住民や企業との交流を進め、「自分や地域に誇りを持ち、大切にできる子どもの育成」に取り組んできた。本校はユネスコスクールとしてそれらを発展させ、各生徒が、持続可能な社会の担い手に必要な知識、能力、態度、価値観を身につけることを目的として、ふるさと理解プロジェクト、及び、ふるさと貢献プロジェクトを各教科等と関連づけながら全校で実践している。

2 研究のねらい

松永中学校の研究主題は以下の通りである。

「児童生徒が主体的に考え学び合う中で、「分かった」「できた」を実感できる授業づくり
～思考スキル・コミュニケーションスキルの活用を通して～
問題解決的な学習、体験的な学習を適切に取り入れた道徳の指導方法の工夫

新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」が求められていることはもちろんであるが、なにより「これまでの『道徳の時間』の課題」「生徒を取り巻く状況の変化」を受けて、「自らの人生や社会における答えが決まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探求し、『納得解』を得るための資質・能力が求められる」ことを踏まえながら、「特別の教科 道徳」を実施していかなければならない。そこで本校でこれまで取り組んできた、思考スキル・コミュニケーションスキルの活用を通じた授業づくりは継続しながら、「問題解決的な学習」「体験的な学習」を取り入れた道徳の授業の開発を新たに加え、研究を行うこととした。また、本校は、変化の激しい社会をたくましく生きる力として福山市が設定している“21世紀型スキル&倫理観”のうち、「感性・思いや

り」を重点項目として取り組んでいる。学校教育全体として「感性・思いやり」を育むことはもちろん、その基盤となる、「特別の教科 道徳」からのアプローチも意識した教育活動が実現するべく、上記のような研究主題を設定した。

3 研究の内容

道徳教育推進教師（加配教員）及び研究主任で、道徳の時間での生徒の様子を観察したところ、以下の課題が見えた。

- ①自分の考えを書かない生徒や指名されても自分の考えを発表できない生徒
- ②板書を写すことに集中し、そのことに満足してしまっている生徒
- ③自分の考えを伝えたり、仲間の考えを聴いて自分の考えを見直して深めたり広げたりしている様子が乏しい生徒

そこで、まずは発問を精選して中心発問でしっかり考えたり、交流したりする時間を持つことや、考えを交流する時にホワイトボードを活用したり、3～4人組で活発な交流になるよう授業改善から行った。研究授業では、それらの改善ポイントを踏まえた授業を提案し、職員全体での取組になるよう共有化を図った。また校内でミニ研修会を行い、模擬授業形式で中心発問の場面を取り上げ、授業のイメージ創りを行った。また、各学年、継続して道徳通信を発行し、学習のフィードバックを行った。



図1 道徳通信「心のノート」

4 研究の実践

(1) 授業改善の充実

従来までは、「発問を提示し、板書する」「生徒がワークシートに書き写す」「その内容を発表する」という流れで展開していた。そこで、生徒は中心発問のみ記入するよう統一した。そのことにより、自分や教材文との対話、班での対話の時間を確保することができた。また、各教室にマグネット付ホワイトボードを設置し、班での対話の内容を全体で共有できるようにした。そのことにより、ホワイトボードの内容に共感する発言、疑問を投げかける発言が見られるようになった。昨年度は、「問題解決的な学習」「体験的な学習」を校内研修で提案し、目指していく授業の方向性を全体で共有した。



図2 生徒の司会による討議



図3 議論の内容をホワイトボードにまとめる

研究授業における授業づくりには、道徳教育推進教師とともに、学年の教員も参加している。自主的に模擬授業を行ったり、同様の教材を別クラスで先行実施して反応を分析したり等、様々な検証を重ねて実践している。本年度は、現時点で6月と7月に「特別の教科 道徳」における校区内研修を実施している。特に問題解決的な学習を意識した授業づくりを授業者と共に目指した。

実践①「好きな仕事か安定かなやんでいる」(新しい道徳3 東京書籍所収)【内容項目 C(13)勤労】

→「あなたが1番共感できるのは、誰の意見でどのようなところですか。」について、個人・グループで考えた。グループ学習では、自分たちが選択した、AからDまでの4つのグループに分かれて、理解を深めると共に、そこで話し合いの内容を踏まえて、クラス全体での対話を行った。他者の考えを知り、多面的・多角的な見方に触れ、自分の考えを深めた。以下、Aは交流時のメモ、Bはそれを受けて意見をまとめたものである。

A

MEMO

③ 今が全てではないということに共感できた。

① 気の進まないことを無理してやるより、やりたきことを喜んでやる方がはるかに多くを成しとげられるという文章に共感。

② 好きなこととして金銭的に困ってほうとた突してはいるのは仕事だけで“プライベート”などは楽しむことができると思ったから。

B

やはり安定した仕事(現実的な生き方)を重視してやるのが大切。

基礎を作っていくのが大切。今の自分のやりたいことを優先させないのが大切。

全てをたら
⇒ 少し自分の理想を折り交ぜて最終的に将来困らぬようにするのが大切。

実践②「本が泣いています」(新しい道徳1 東京書籍所収)【内容項目 C(12)社会参画, 公共の精神】

→「制約なく自由に利用できる図書館にするために私たちができることは何だろうか。」について、個人・グループで考えた。教材を、より“自分ごと”として捉えられるよう、自分がどういう立場であるのかを表明する活動を設定した。また、自分たちが生徒総会で提案した内容(トイレのスリッパがきちんと並んでいるか点検してほしい)が、本教材で迫った道徳的価値とどのように関連するかについても考えることができたことで、自己を広い視野で見つめることができただけでなく、自分たちの価値観を改めて捉えなおすことにも繋がった。



図4 名前カードで意見の表明を行う



図5 道徳的価値を基に広い視野で論じる

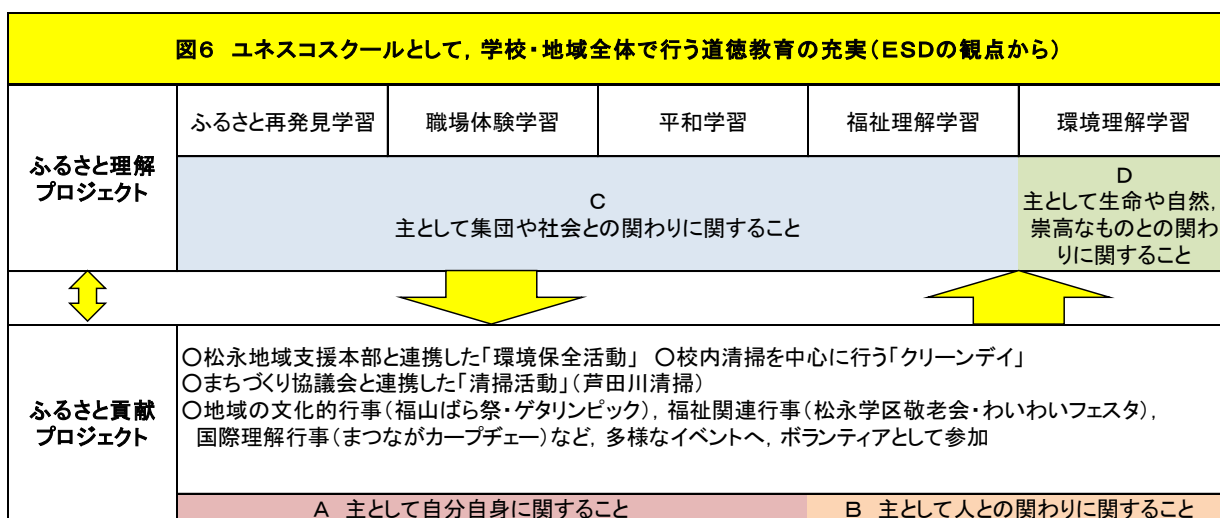
(2) 研修の充実

昨年度から、大阪教育大学の藤永芳純名誉教授を講師として招聘し、指導を受けている。指導案検討から参加頂き、どのような授業を目指していくのか、どのように教材分析を行うのか、授業のどこを改善すれば深い学びになったのか、を詳らかにすることで、授業者の質の向上を図っている。

また、本年度の4月に「特別の教科 道徳」の実施にあたっての校内研修を行い、教科書の構成把握、学年ごとの授業開き案検討を行った。合わせて学習評価の仕方についても意識統一できた。

(3) 学校・地域全体で行う道徳教育の充実

本校は、ESDの観点を踏まえながら、学校全体でこれまで取り組んできている内容を整理、一本化すると共に、その意義を教職員が再確認し、教育活動を行っている。



5 成果と課題

(1) 成果

授業改善や研修を充実させたことにより、「特別の教科 道徳」への取組に、“組織”として変化が見られたことが一番の成果である。これまでは、従来の発問応答型の授業で展開されていたものが、ホワイトボードを活用した班討議を行うなど、展開に工夫が見られるようになった。また、授業の質にも深まりが見られ、「道徳的価値を理解させる」のではなく、教材を「自分ごと」として捉え、道徳的価値を基にして自己を見つめるといった、終末を意識した授業が展開されるようになってきた。

また、平成31年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙では、「1・2年生のときに受けた道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいたと思いますか」という質問に対し、88.5%の生徒が肯定的評価を行っている。平成29年度の同様の質問項目では、76.7%だったことから、改善傾向にあると言える。

(2) 課題と今後に向けて

道徳を研究の中心に据えて、まだ2年目である。まずは、現在の方向性を全教職員が理解し、継続して実践することが求められる。その上で、問題解決的な学習だけでなく、体験的な学習を適切に取り入れた授業の開発を行うことが課題である。本年度から採用している「新しい道徳」(東京書籍)では、役割演技を取り入れたユニットが設定されている。それらを実践後、道徳教育推進教師も交えた学年内でのフィードバックを行うなど、教職員自身が主体的に取り組むことが、授業の充実につながる。そのことが結果として、学校の教育活動全体としての道徳教育へと還元されていくと考える。